

2020. 11. 22. 聖霊降臨節第26主日礼拝式説教

ルカ福音書講解説教

聖書：ルカによる福音書15章11-32節

『失われた者への愛』

ある人に息子が二人いました。弟のほうの息子は父に財産の生前贈与を求めました。当時の習慣にはないことでした。しかし弟は構わず、父から自分の分の財産を受け取り、遠い国に行き、思うがまま、自分の意のまま財産を使い果たし、零落しました。その地に飢饉が起こり、弟はその地方の人に家に身を寄せ、豚の世話をすることになりました。豚はユダヤ人が忌み嫌う動物です。その世話をするので、彼は食べるものに困窮しただけでなく、身を落としたのです。そこで彼は我に返り、父の家に帰ることに思いを定めます。

さすがにあんまり虫がよすぎると思ったのか、雇人の一人としておいてください、というつもりで帰路に就きました。しかし父はこの息子の帰りを待ち続けていました。まだ遠く離れていたのに、父は息子を見つけて、走り寄って抱きしめて迎え入れるのです。息子の言葉もそこそこに、父は息子の帰還を喜び、最上の服を着せ、指をはめ、宴会の準備を始めさせる。父の喜びの大きさが伝わってくるのです。

兄が畑の仕事から帰ってくると、家からざわめきが聞こえます。宴会、それも音楽や踊りのざわめきです。僕（しもべ）を呼び、何事か、と聞くと僕は「弟さんが帰ってこられたのです。それでお父様が宴会を開いておられるのです」、と言う。兄はあきれ、そして怒って家に入ろうとしない。父は出てきて兄を迎えるのですが、その父に対して、兄は不平をぶつける。父は兄に対して「子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ」と言い、だがお前の弟は、死んでいたのに、生き返り、いなくなっていたのに、見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのはあたりまえではないか、と語りかけるのです。

今日の聖書箇所は福音書の中でも最も有名なたとえです。それだけに、改めて虚心に読んでいくことが大事です。このたとえは新共同訳聖書の小見出しがそうであるように、「放蕩息子のたとえ」としばしば呼ばれていますが、そう

呼ぶのは、中身に即してはいないと読んで感じます。このたとえには、弟だけでなく、兄も出てきています。出ているというだけでない、兄のこともこのたとえにおいて見過ごすことはできないのです。けれど、そもそも、このたとえは息子のたとえではなく、父親のたとえなのです。このたとえで最も大事なことは、父の愛だ、ということは読んですぐわかることです。だとすればこのたとえは「放蕩息子のたとえ」ではなく、「二人の息子を愛した父のたとえ」と呼ばれるべきなのではないか。

弟は財産を譲り受けて家を出たのです。親の許も、兄の許も飛び出して、自分の思うがままに暮らしたのです。そしてお金を使い果たし、零落し、行き場を失い、豚のエサを食べたいというところまで身を落とした。そこで彼は我に返ったという。でも彼は悔い改めたわけではない。改心したり、回心したりしたわけでもない。我に返ったとは土壇場で自分の我に気づき、その我を通そうとした、というだけのことなのではないでしょうか。

何も変わっていない息子。雇人の一人にしてください、と思い始めたのは、殊勝なことを言っているようで、実のところただ父の家に帰って腹いっぱい食いたい、というわがままなのではないか。どこまでも自分本位なのかもしれない。

兄は、おそらくはまじめに父の仕事を手伝い、この日も畑仕事から戻ってきた。弟が帰ってきたという。兄は弟が遊び惚けて、財産を使い果たし、零落して帰ってきたことをすぐさま知ったのです。そしてその弟のために父が宴会を開いているという、そのことが許せなかった。父は自分のために宴会など開いてくれたことはない。それなのに、バカ息子が帰ってきたら、子牛まで屠って宴会を開きこの騒ぎよう。父が渋々このバカ息子の帰還を迎え入れたというのならやむを得ないとしても、何の反省もせず、ただ父の財産を浪費したこの息子の帰還を喜んで迎え入れ、宴会までする父の態度は、バカ息子を甘やかすこと以外の何ものでもなく、赦せなかったのかもかもしれない。

弟と兄とは違う。弟は遊び人で兄はまじめな人、という物指をあてれば、二人は全く違う。しかし弟は、自分の思うがままに我を通し、兄は兄でそのまじめさゆえに弟を全く受け入れようとしないという仕方で我を通して。二人は自分本位という点では実は同じなのです。

しかしこのたとえは、弟と兄のそれぞれの姿を描くことに終始しているたとえなのではない。この二人の息子の中に立っている父親を描くたとえなのです。

父は、財産を受け取ってそれを使い果たし、また自分勝手に帰ってきた息子を受け入れ、その帰還を喜び、その喜びを分かち合おうとしたのです。

そしてこの父は、弟を受け入れようとせず、宴会まで開くとは何だという兄をやはり受け止め、わたしはいつも一緒だと言い、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった弟の帰還を喜ぶのは当たり前だ、と語りかけるのです。

弟と兄は何も変わっていない、と読むことができます。少なくとも、二人とも悔い改めなど何もしていない。おそらくは仲のあまりよくない、すれちがひも多い兄弟。このたとえの中で、弟と兄とは一言も口をきいていない。ただいまもお帰りもない。二人を見ているだけなら、エゴとエゴとがぶつかり合っている人間の姿を見せつけられるだけです。しかし二人の間には父がいて、父は二人をそれぞれに迎え入れ、その存在を喜び、二人を愛して、父の愛の中に受け入れているのです。

ルカによる福音書15章には三つのたとえが連続しています。そしてこの三つのたとえには「失われる」「見いだされる」「喜ぶ」という共通する話の骨格がある、ということを見てきました。弟は自分から飛び出し、失われたものとなり、父に迎え入れられ見出され、父の喜びの中に置かれたのです。兄は家も出ず、父のそばにいたにもかかわらず、「失われている」のです。なぜなら彼は父のそばにいるのにも関わらず、父の愛を見失っているからです。だから彼も見いだされ、喜びの中にあることを知らなくてはならないのです。

そしてもう一つ、この三つのたとえには共通点があるというお話を先週しました。それはこれらのたとえが悔い改めのたとえだということでした。そしてその場合、悔い改めというのは、わたしたちが普段考えているような、わたしが心を入れ替えるとか、改心とか言ったことでは全くなくて、キリストによって、見出され、神によって見出され、神の愛の中にある自分に気づくこと、それが悔い改めなのだということを知らされてきました。

最初のたとえの羊も、次の銀貨も人間ではなく、悔い改めなどしようにも、できない存在が題材になっていました。そして今日のたとえ。弟も兄も、確か

に人間ではあるけれど、二人は父の前で改心も、悔い改めも何もしていない。

すなわち、ルカ福音書15章の三つのたとえは、三度も繰り返し主イエスの肉声を届けるのです。それは大事なことは自分が神の前でどれほど回心できるとか、神にふさわしい人間になれるか、というようなことではないんだ、ということなのです。

わたしがどんな人間であろうが、自分から神のもとを飛び出して、わがままに生きている人間であっても、自分の殻の中から出ようとしないうる自分本位な人間であっても、迷子になってそれさえ気づかず人生をふらふらしている人間であっても、そんなことにかかわりなく、神は、イエス・キリストは捜し続け、見出し、迎え入れ、わたしという存在を愛し、いとおしみ、存在そのものを喜んでくださる。

大事なことは、そのような神の、イエス・キリストの愛の中にある自分に気づくこと、そのことなのです。それがわたしたちにとって悔い改め。主イエスは、ここで、三つのたとえを語ることで、わたしたちにそのことを伝えようとしておられるのです。